

11. 自然啓示と特別啓示

ペテロの手紙#11

<https://ichthys.com/Pet11.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

復習： 前回の学びでも触れたように、『ペテロの第一の手紙』は霊的成長のテーマに深く関わっています。特に、苦しみ(苦難)がクリスチャンの成長過程においてどのような役割を果たすか、という点が大きな焦点となっています。したがってペテロの手紙の解釈に進む前に、霊的成長の教理について詳しく学ぶ必要があります。これは非常に価値あることです。というのも、クリスチャンとして生きる目的そのものが霊的に成長することであり、また他の人が成長するのを助けることでもあるからです。他の人の霊的成長を助けることは奉仕(ミニストリー)と呼ばれます。そしてそれは、各クリスチャンに与えられた霊的賜物の働きにある程度左右されます。一方で、霊的成長の過程自体は、すべてのクリスチャンに共通しています。霊的成長というのは幅広いテーマですが、その中心は非常に単純で、ただ一つの焦点に集約されます。霊的成長とは、神の真理を学び、それを生活の中で実践することです。ですから、真理こそがクリスチャン生活の鍵なのです。

真理： では、真理とは何でしょうか？ まず最初に言えるのは、悪魔の支配するこの世の中で、私たちを自己中心的な悩みから引き上げ、神のご計画と御心に心向けさせることができる唯一のものが、神の真理であるということです。真理だけが、私たちを教え、慰め、励まし、そして進むべき方向を示してくれます。他のどんな原則よりも、神の真理を知り、それを実生活の中で適用することこそが、主イエス・キリストを信じる者としての世の人々を区別する最大の特徴です。イエスご自身も、この真理のためにこの世に来られたと宣言されました。ポンテオ・ピラトによる尋問の場で、イエスはこう言われました「あなたが言うとおり、わたしは王である。わたしは真理についてあかしをするために生れ、また、そのためにこの世にきたのである」([ヨハネ 18 章 37-38 節](#))。これに対してピラトは答えました「真理とは何か？」([ヨハネ 18 章 38 節](#))。ピラトは神の真理に本気で関心を持っていたわけではありません。しかし、信仰者にとって真理は生きる糧であり、霊的成長のためのまさに母乳のようなものです([第一ペテロ 2 章 2 節](#))。では、ピラトの質問に私たちはどう答えるべきでしょうか？ 真理とは本当のところ何なのでしょう？

まず第一に、すべての真理は神から来るということです。なぜなら、神ご自身が真理だからです。イエスは[ヨハネの福音書 14 章 6 節](#)でこう言われました、「わたしは道であ

り、真理であり、命である」。したがって、イエス・キリストを知ることが、真理を知ることなのです。しかし、私たちはこの地上に生きている間に、全知全能で遍在する創造主を完全に「知る」ことなどできるでしょうか([第一コリント 13 章 12 節](#))。神はその恵みによって、人間がこの世の生涯で理解し、用いることのできる特定の真理のまとまりを備えてくださいました。この「真理のまとまり」は、知ることができ、また実生活で活用できる知識の宝庫であり、大きく分けて二つの領域に分類されます：

- (1) すべての人に与えられている「**自然啓示**」による真理
- (2) イエス・キリストを信じる者だけが受け取ることのできる、「**特別**(または超自然的)な啓示」による真理

自然啓示：神はこの宇宙の創造主です([創世記 1 章 1 節](#))。そのため、宇宙に存在するすべてのものには、創造主である神のしるしが刻まれています。この種類の真理には、私たちが被造物を観察し、その壮大さと複雑さに驚くことで触れることができます。たしかに、この経験的な方法で神の性質について多くのことを学ぶことは可能ですが、聖書は特に、神が自然界を通して不信者にも示しておられる二つの主要な真理を強調しています。

(1) **神の存在の事実は、被造物を見つめることで明らかである。**[詩篇 19 篇 1-6 節](#)は、「天は神の栄光をあらわし」と述べています(参照：[ヨブ 36 章 24-25 節](#)；[詩篇 8 篇 1-3 節](#)，[97 篇 6 節](#))。つまり、宇宙の壮麗さや自然界の美しさを思うとき、人は心の内で「創造主が存在しなければならない」と悟るのです。

パウロもこのことを明確に述べています：

神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性と[の真実]は、天地創造このかた、[日常的な経験から]被造物において知られていて、明らかに認められるからである。したがって、彼らには弁解の余地がない。[\(ローマ 1 章 20 節\)](#)

さらに、パウロのここでの言葉([ローマ 1 章 20 節](#))は、詩篇記者の述べたことをさらに発展させています。ローマ 1 章 20 節では、神の創造の驚くべき性質から神の存在の事実が明らかにされるだけでなく、創造を観察することによって**神がどのような方であるか**ということまで理解できると述べられています。神は全能であるだけでなく、公正で義なる方であるのです。この概念は、第二の「真理」においてさらに強調されています。

(2) 神の存在の事実は、「善悪の概念」を深く考えることによっても明らかです。同じくローマ人への手紙([ローマ 2 章 14-16 節](#))で、パウロはこう説明しています。神の言葉(律法)を持たない異邦人の中にも、本能的に「ギリシヤ語 φύσις (physei/フウシイ)、「生まれながら」]正しいことを行う者がいるというのです。これは、神がすべての人間の良心の中に「善と悪の基本的な概念」を植え付けておられるからです(参照:[第一コリント 11 章 14-15 節](#))。さらにパウロは、これらの異邦人の良心が、あるときは自分の行いを正しいとし、あるときはそれを責めると述べています([15 節](#))。つまり、罪の意識もまた、アダムとエバの子孫である私たち人間に受け継がれた遺産の一部なのです(参照:[箴言 20 章 27 節](#)。「人の霊は主のともしびであり、人の心の奥を探る」とあるように、心を吟味することは人の霊の自然な働きです)。

神からの直接の語りかけがなくても、天使の訪れがなくても、聖書の教えを受けなくても、さらには聖書そのものを持っていなくても、人類すべての者は、誰にでも明らかな事実を観察することによって、ある霊的な真理を知っています。認めようとするか否かにかかわらず、実際にはすべての人が、世界を造られた神が存在し、自分たちもその神によって造られたのだと理解しています。すべての人が、神が正義と義に満ちたお方であることを知っています。すべての人が、善と悪、正しいことと誤ったことの区別を理解しています。そしてすべての人が、どんなに善良に生きようとしても、自分のうちに悪があることを認めざるを得ません(これらのことは、聖霊が来られた後ではなおさら明らかです([ヨハネ 16 章 8-11 節](#)))。神はその比類なき恵みによって、この世をそのように秩序づけられました。すなわち、宣教師の働きや特別な「しるし」がなくても、人間は皆、人生の根本的な問題を知ることができるようになっているのです。——すなわち、私たちは皆死を迎えねばならず、助けがなければ、正しく義なる神の御前に立たねばならないという問題です。その神は確かに存在し、私たちの人生で行った悪について、弁解の余地はまったくありません。人生のどこかの時点で、人は皆、たとえ一瞬であっても、この現実気づくのです。そして本来であれば、この気づきこそが、神についてさらに知りたいという強い動機になるはずです。なぜなら、この問題の解決は、明らかに神ご自身のうちにしか存在しないからです。

参照リンク(未翻訳)：

[聖書の基本 第4B巻:救済論 第II部 自然啓示](#)

[存在論的議論と宇宙論的議論](#)

[不信仰とその結果](#)

[無神論と自然啓示](#)

[自然啓示と神のかたち](#)

[自然啓示についての補足](#)

特別啓示(または「超自然的啓示」)：神は、自然界の観察を通して知ることのできる基本的な真理を超えて、さらにご自身について知りたいと心から願う人には、恵みによってその求めに応えてくださいます。自然の働きを通して神の存在を悟り、もっと知りたいと願う人には、神は必ず、御自身との関係を始めるために必要な情報(すなわち福音のメッセージ)を与えてくださり、また、その後に霊的に成長するために必要な情報(今日の私たちの場合、それは聖書と、健全な聖書の教えです)も備えてくださいます。福音のメッセージについて、イエスはこう言われました。「しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」([ヨハネ 4 章 14 節](#); [ヨハネ 3 章 5 節](#); [エペソ 5 章 26 節](#)参照)。神は、だれも御自分の真理に渴いたままにされることはありません。実際、[イザヤ 55 章 1 節](#)で「さあ、かわいている者はみな水にきたれ」と語られるように、神はすべての人に向かって、十分に飲むようにと招いておられます。このように、信者・未信者を問わず、神が与えられる、文字どおり「超自然的」な情報の提供を特別啓示(special revelation)と呼びます。

人類の歴史を通じて、神は御自分の真理を受け取る心のある男女に、さまざまな方法で語ってこられました。神はしるしや幻、夢や御使い、預言者や祭司などを用いられました。しかし、今日において神の真理(すなわち特別啓示)の主要な入手源は聖書だけです。もちろん、未信者が聖書を独力で読み、福音のメッセージを見いだすことも、また信者が助けを借りずに聖書からいくつかの真理の原則を汲み取ることも可能です。しかし、それが神の真理を得るための唯一の、また最もふさわしい方法というわけではありません。たとえて言うなら、もし聖書が真理の水の源泉だとすれば、その水を最も効果的に、また満足のいく形で飲むためには「コップ」を使うのがよいでしょう。泉には水が含まれていますが、飲みやすく注ぎ出すようには造られていません(飲料用の水道とは違って)。同じように、聖書には、未信者が救われるために必要なすべての情報と、信者が霊的に成長するために必要なすべての情報が含まれています。しかし、それらはすぐに理解しやすい形でまとめられているわけではなく、手引書ではなく文章として記されているのです。このため、神は教会の中に仲介の器として、聖書教師を立てられました。彼らは神の真理をより理解しやすい形で人々に伝えるために召されたのです。したがって、聖書を解き明かす適格な教師による説き明かし(講解)は、信者にとって非常に重要であり、同時に個人的な聖書研究の実践と並んで欠かせないものです。

未信者は、たとえ聖書を手にしても、福音のメッセージをはっきりと見いだすことなく、何か月もあちこちをさまようことがあるかもしれません。特に旧約聖書から読み始め

た場合にはそうです(もっとも、福音は確かにそこに示されています;[ヨハネ 5 章 39 節](#)参照)。しかし、多くの場合、そんなに骨の折れる道のりをたどって永遠のいのちの泉にたどり着く必要はありません。なぜなら、神は恵みによって、求める未信者が飲むことのできる「杯(さかずき)」を備えてくださっているからです。では、その「杯」とは何でしょうか?それは、他ならぬ私たち自身なのです。私たちは、救われていない人々のために、神の真理を伝える仲介の器とされているのです([第二コリント 4 章 7 節](#))。ですから、すべての信者は、福音のメッセージを明確に理解し、イエス・キリストを求める人に対して、それをわかりやすく、そしてすぐに伝えられるようになっていなければなりません。霊的成長を真剣に願う人は、このどちらも軽んじることはできません。

「福音(Gospel)」という英語は、もともと「良い知らせ」という意味で、ギリシヤ語のエウアンゲリオン(εὐαγγέλιον)の訳語です(「エヴァンジェリカル=福音主義的」という言葉もここから来ています)。神は、私たちが御自分の裁きを免れ、永遠のいのちを得る道を備えてくださった——これ以上の「良い知らせ」はありません。この良い知らせを、まだ救われていない人に伝えるとき、私たちはコップ、すなわち尊い命の水——イエス・キリストについての神の真理である福音のメッセージ——を運ぶ素朴な土の器なのです。神が私たちにそのような働きを望んでおられることは明らかです。なぜなら、神は「すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられる」からです([第一テモテ 2 章 4 節](#); [第二ペテロ 3 章 9 節](#); [ヨハネ 3 章 16 節](#)参照)。したがって、「福音(Gospel)」という言葉は、主イエス・キリストに関する良い知らせ—すなわち、イエスを信じることによって、私たちは神の怒りから救われ、永遠のいのちを得るという知らせ—を意味しています。

福音には多くの側面があり、聖書のほとんどの教理に関係していますが、実際的な意味で、未信者が理解して実行すべきことはただひとつです——それは、[使徒行伝 16 章 31 節](#)にあるパウロの言葉、「主イエスを信じなさい。そうすれば救われます」という命令です。救いは、イエス・キリストへの信仰を通して与えられる神の恵みによって来るものです([エペソ 2 章 6-8 節](#))。したがって、聖書を一度も読んだことがなくても、未信者は救われることができます。その人の渴きは、すぐに、そして簡単に癒やされるのです。しかしながら、この救いをもたらす真理の水にはその源(すなわち根拠・記録)があり、それは聖書の中にあります。福音の水は、聖書から私たちの心に流れ込み、私たちの口を通して未信者の心へと流れ込み、主がそのみことばを送られた目的——人を救うこと——を成し遂げるのです([イザヤ 55 章 10-11 節](#))。

この「コップ」の原則は、信者に対しても同じように当てはまります。私たちが他の信者に神のことばの真理を教える時、私たちは仲介の器の役割を果たしているのです。

プリスキラとアクラは、使徒パウロから十分に真理の原則を教えられていたので、アポロに対してキリスト教についてさらに正確に教えることができました([使徒行伝 18 章 24 節](#)~)。このように、私たち一人ひとりにも互いに真理を語り合う責任があります([エペソ 4 章 15 節, 25 節](#))。私たちは、学んだ教理の原則を伝える時にも、単なる励ましの言葉をかける時にも、いつか必ず「教える」立場に立つことになるでしょう。このようにして、教会は互いに助け合い、支え合うこの霊的成長のネットワークを通じて自らを成長させていくのです([エペソ 4 章 16 節](#); [コロサイ 2 章 19 節](#))。ですから、私たちは他の信者と話す時には、「<塩で味付けられた言葉を>恵みをもって語る」([コロサイ 4 章 6 節](#))ことを意識し、神のことばの真理による励ましを与えるようにすべきです。持続的な霊的成長には、このようによく準備された「霊的な食物」の安定した供給が欠かせません。そのために、神は教会に「教師」という賜物をお与えになったのです([エペソ 4 章 11 節](#)~)。霊的成長——すなわち神の真理を自分のものとして吸収していく過程——の中で重要な要素は: (1) 個人的な献身 (2) 謙遜 (3) 体系的な聖書の学び (4) 聖霊の導きの働きの四つです。

復習: クリスマンとして生きる目的は、自ら霊的に成長し、他の人の霊的成長を助けることです。霊的成長は、神の真理を理解し、それを実生活に適用することによって得られます。神についてのいくつかの真理は、自然啓示—つまり世界の観察を通して—知ることができます。また、ひとつの単純な真理(すなわち福音:「救いはキリストへの信仰によって与えられる」)を理解することで、神と永遠の関係を持つことができます。しかし、霊的成長には、聖書に含まれるあらゆる真理の領域を吸収し、身につけていくことが求められます。今回は、真理を吸収するために必要な要素を取り上げ、霊的成長がどのような過程で起こるのかについて考察していきます。

関連リンク<未翻訳>:

- [聖書は「神聖なもの」として](#)
- [聖書の各書の年代順](#)
- [ヘブル人への手紙の正典性](#)
- [聖書を読みましょう](#)
- [神による靈感\(ディヴァイン・インスピレーション\)](#)
- [「誰の聖書解釈が正しいのか」をどう見分けるか](#)
- [「誰の聖書解釈が正しいのか」パート 2](#)
- [いわゆる「文書仮説」](#)

- ・ [歴代誌と列王記の関係](#)
- ・ [文書仮説についてさらに詳しく](#)
- ・ [外典\(アポクリファ\)](#)
- ・ [『欽定訳聖書\(KJV\)』と『新欽定訳\(NKJV\)』の比較](#)
- ・ [『新国際訳聖書\(NIV\)』と翻訳に関する諸問題](#)
- ・ [Ichthys での聖書翻訳の使い方](#)
- ・ [『欽定訳聖書\(KJV\)』の著者は誰か？](#)
- ・ [「トマスによる福音書」](#)
- ・ [なぜ新約聖書はギリシヤ語で書かれたのか](#)
- ・ [正典性の問題:外典、『エノク書』、そして靈感](#)
- ・ [『ヨハネの黙示録』の正典性](#)
- ・ [「ユダによる福音書」と「正典性の問題」](#)
- ・ [マタイは自分の福音書をヘブル語で書いたのか？](#)
- ・ [クリスチャンへの警告](#)
- ・ [有名な加筆\(挿入句\)について](#)

→ 次へ:「ペテロ#12:種まきのたとえ」